

四旬節第三主日

於 板橋教会 2010.3.7

(ルカ 13・1-9)

四旬節第三主日を迎え、今年もこの一日を特別におささげして、例年のようにご一緒に四旬節の黙想会にあずからせていただきます。今日の福音の後半部分には、なかなか実をつけないイチジクの木のお話が出てきますが、このお話にこめられたイエス様の私たちへの思いを素直な心になって受け止めることが出来る恵みを願って、今日の黙想の時を祈りのうちにおささげすることにいたします。

イチジクの木のとえ話を語られるイエス様のおことばは、どのように私たちの心に響いているのでしょうか。このイエス様のおことばを受けて、何か訳も分からないままに上司に叱責されているような思いになるかもしれません。「お前たちは実を結ばない、役立たずのイチジクだ」。イエス様にこのように言われれば、たしかに、私たちはイエス様の前に頭を垂れざるを得ません。けれども、そうやってイエス様の前に頭を垂れる私たちの心の中に、何かむらむらとした思いが湧き起こって来るかもしれません。何かイエス様に裏切られたような気になるかもしれません。イエス様のイチジクの木のとえ話を、業績の不振にあえぐ経営者や、ノルマの達成をあせる上司の叱責のことばのように聞くとするなら、イエス様に裏切られたような思いになるのも当然です。私たちがイエス様を求めて、こうしてそのみ前に集うのは、私たちが身を置いている常に結果を求められる、私たちを追い立てるような社会の中であって、せめて心の憩いを味わうことを願うからです。イエス様の福音とご聖体に力づけられて、心の英気を取り戻すことを願うからです。イエス様のもとに来て、社会の中に生きると同じように、実を結ぶこと、結果を出すことだけを求められ、それが出来ないといって叱責されるのだとしたら、私たちは文字通り立つ瀬がないことになってしまいます。だから、今日のイエス様のおことばは私たちの真剣な応答を求める厳しさを秘めてはいますが、弁解のしようもない叱責のことばとして受け止めてはいけないのだと思います。

今日の福音の前半の「あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる」というおことばも、先行きの見えない、将来に光が見えない今の私たちの社会状況の中であって、私たちの心を覆っている陰鬱な漠然とした滅びへの予感を増幅させるだけのおことばではないはずです。イエス様のおことばを、このような時代を生きる私たちの心の不安を見透かして闇雲に信仰に勧誘する、よく見られる宗教的なキャンペーンの一つに過ぎないと聞き流してはいけません。

最初にも申しましたが、今日の黙想会にあずかる私たちの心が開かれ、今日の

福音を通して私たちに語りかけておられるイエス様の思いはどのようなものであるのか。イエス様は私たちにどのようなことを求めておられるのか、一人ひとりの私たちにお示しくださることを願って祈りのうちに過ごしたいと思います。今日、この黙想会でお話させていただくのは、先程聞いた、今日の福音の前半と後半のイエス様の二つのおことばの私なりの受け止め方に過ぎません。繰り返しますが、大切なことは私たちの心が開かれて、私たち一人ひとりがイエス様の思いを受け止めさせていただくことです。

このミサの中では今日の福音の流れに従って、前半のイエス様のおことばを黙想してみることにいたしましょう。

「言うておくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる」。イエス様はこのおことばをもって、私たちにどのようなことを訴えようとなさっておられるのでしょうか。最初の「言うておくが」というおことばは、なかなか悔い改めようとはしない、実を結ぶことのないイチジクの木のような私たちを突き放す、冷たい響きを持ったことばではないはずで、むしろ「あなたたちにぜひ聞いて、分かってもらいたい」というイエス様の私たちへの思いを伝えるおことばとして受け止めさせていただきたいと思います。「あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる」とイエス様は言われますが、イエス様が私たちに滅びてほしくないと言われる、滅びるとはどのようなことであるのでしょうか。私たちはこの「滅びてほしくはない」「滅びてはならない」と言われるイエス様のおことばをどのように聞いているのでしょうか。

「あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる」とイエス様が語られるきっかけとなったのは、解説書を見ると、後にイエス様に死刑の宣告を下すローマの総督ピラトがユダヤ人の祭りの時に、ローマの支配に反抗して立ち上がったガリラヤの人々を虐殺したとの知らせをイエス様が聞いたときに語られたというふうに説明されています。また、シロアムの塔が倒壊して犠牲者が出たということも、その頃実際に起こったことである言われています。それらの出来事を受けて、「あなたがたも悔い改めなければ皆同じように滅びる」とイエス様は語られたと今日の福音は告げています。あの時、イエス様はどのようなことを思ってこのおことばを語られたのでしょうか。あるいは福音書を書いた人は、このイエス様のおことばをどのように受け止めてそれを福音書の中に書き留めたのでしょうか。

福音書全体が語るイエス様というお方は、神様から遣わされて、神様からのメッセージである福音を伝えるために、この世に来てくださった神の子であるお方です。イエス様の福音は、旧約のイスラエルの信仰を受け継ぐ神の民である当時のユダヤの人々に神様のおことばを告げ、神様のもとに立ち戻るようにと

訴える、神様がイエス様に託されたメッセージです。イエス様は「神のみことば」として、この神様から託されたメッセージを伝える使命を全うするためにそのいのちをおささげになられたのです。

イエス様が言われる「悔い改めなければ・・・」というおことばは、イエス様によってもたらされている神様からのこの福音のメッセージを受け入れて悔い改め、神様への信仰に立ち戻らなければ、あなたがたも皆同じように滅びると告げておられるのです。ユダヤの社会の指導的役割を担っていた人々が、イエス様のこのメッセージに対してどのように振舞ったかは、イエス様の十字架の死が示している通りです。そしてその後四十年もたたずに、ユダヤの国はローマ帝国によって完全に征服され、滅びることになってしまったことも歴史が語るとおりです。今日のイエス様のおことばは、そのような状況の中で語られたおことばです。イエス様の復活によってイエス様を信じ、イエス様の弟子となった最初の教会の人々は、自分たちの祖国と自分たちの同胞がたどった運命を、イエス様の今日のおことばを思い起こすことによって、イエス様が見ておられたように理解し、受け入れていったのです。つまり、イエス様の今日のおことばを、ユダヤの人々が経験した歴史的破局を預言するお言葉として理解したのです。今日の福音の「悔い改めなければ滅びる」というイエス様のおことばはこのような文脈の中で語られているおことばです。それだけではありません。イエス様の十字架の死と復活を、神様がこの世界にもたらしてくださった、神様の決定的な救いのみわざであると信じ受け入れた最初の教会の人々は、自分たちは、このイエス様への信仰によって神様からの救いの恵みを受け、ユダヤの人々に替わる新しい神の民とされた者たちなのだという自覚を深めて行ったのです。そのような最初の教会の中で福音書は書かれ、その中に今日のイエス様の預言のおことばも書き記されているのです。こうして、あの時イエス様がユダヤの人々に語られたおことばは、新しい神の民とされた教会に向けて語られているおことばとなったのです。

イエス様の十字架の死と復活において示された神様の救いを信じ、その信仰によって新しい神の民とされた教会の中に身を置いて、今日のイエス様のおことばを聞くとき、「あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる」といわれるイエス様のおことばはどのように私たちの心に響くでしょうか。イエス様が滅びるといわれる滅びとは、私たちの何が滅びることなのでしょうか。ユダヤの人々は、神様が世の終わりまで、彼らの中に留まり続けてくださる場として約束されていたエルサレムの都と神殿を失ってしまいました。それによって、神の民としての大切なアイデンティティーの拠りどころを失ってしまいました。神様が彼らの父祖に永遠に与えると約束して下さっていた彼らの祖国である約束の地を失ってしまいました。こうして、神の導きの中にある神の民と

しての存立の基盤を失ってしまいました。これが、「悔い改めなければ、あなたがたも皆同じように滅びる」と警告されたユダヤの人々がたどった歴史です。けれども、ここで言うておかなければならないことは、ローマの信徒への手紙の9章以下でパウロが記しているように、ユダヤの人々に対する神様の選びの約束は空しいものになってしまったのではないということです。事実ユダヤの人々はその後も今に至るまで、彼らの父祖たちの神様への信仰を保って生きています。

ユダヤの人々の現在と将来は神様の大きいなる計らいのみ手にお委ねしつつ、私たちがそこから学び取らなければならないことがあるはずです。ユダヤの人々がたどった歴史は、新しい神の民としての私たちキリスト者への警告でもあります。聖書に記されたユダヤの人々の歴史が示すように、「悔い改めなければ滅びる」とのイエス様の警告は、私たちの神の民としての存立の基盤、私たちの信仰が拠って立つ、イエス様への信仰そのものが滅びることへの警告です。従ってそれは、私たちが信じて受け入れたはずの、イエス・キリスト様による神様の救いに対する信仰が私たちの中で崩壊することへの警告です。もしそのようなことになれば、私たちはもはやキリスト者ではなくなってしまいます。そういうことにならないようにイエス様は私たちに悔い改めることを求めておられるのです。「悔い改めなければ、滅びる」とのイエス様の警告は、十字架の死をもって示された私たちへの愛の全てが無意味にならないようにとの、イエス様の私たちへの愛の訴えなのです。私たちのキリスト者としてのイエス様と神様への信仰は絶えず私たちに悔い改めを求めます。何故なら、私たちが生きる今の社会は、私たちがキリスト者として信仰によって受け入れている信仰の世界とは無縁のように思われる社会だからです。そのような社会に身を置いて生きる私たちの心は、いともたやすく、信仰において見出したはずの事柄を見失ってしまうからです。「悔い改めなければ、あなたがたも皆同じように滅びる」とのイエス様のおことばは、そのような、私たちの今の状況に向けられているおことばとして今日のミサの中で響いています。この四旬節の黙想会の目的も、イエス様が求めておられる悔い改めの恵みを願うことにあります。私たちの悔い改めとは、私たちが受けた洗礼の恵みによって、私たちが神様を信じる者とした、イエス様の十字架の死と復活によってもたらされている神様の救いを信じる者とした、それこそが神様の恵みである信仰に立ち戻ることに他なりません。「あなたがたも悔い改めなければ皆同じように滅びる」とのイエス様の今日のおことばを、私たちの心の戸口をたたきイエス様の私たち一人ひとりへの愛の訴えと受け止めることが出来る恵みを願って、四旬節の今日のごミサをともにささげたいと思います。

## 四旬節黙想会第二講話

ミサの中でのお話に続いて、今日の福音の後半に語られているイチジクの木のとえについて黙想いたしましょう。イエス様の語られるこのイチジクの木のとえ話を聞いて、私たちはすぐに分かったという気になるかもしれません。イエス様のお話のイチジクの木は私のことだ。イエス様は私に実を結ぶように言われているのだ。確かにその通りです。その意味ではイエス様のこのたとえ話は、私たちにとって分かりやすいお話です。けれども、この分かりやすさが私たちを当惑させます。イエス様は実を結ぶようにと言われていたけれども、果たして自分はイエス様が言われるように実を結んでいると言えるだろうか。むしろ、このたとえ話のイチジクのように、自分は実を結んではいないのではないだろうか。イエス様が言われるように実を結ぶにはどうしたらよいのだろうか。確かに、イエス様は私たちがこのような思いになることを期待してこのお話をしてくださったのです。けれども、そうやって自分を反省し、その反省を踏まえて自分が決心した実を結ぶ生き方をしようとする、私たちはたちまち結果主義、成果主義の虜になってしまいます。どういうことかと言うと、自分が心に決めた実を結ぶことが出来ているかどうかということが私たちに虜にしてしまいます。実を結べているかどうかということに一喜一憂することになります。なかなか思ったような実を結べない自分に失望し、自分は駄目な信者だと自分で決め付けてしまうかもしれません。それだけではなく、実を結ぶことを要求されることに嫌気を覚え、実を結ぶことを求めるイエス様から身を引いてしまうことになるかもしれません。どうしてそのようなことになってしまうかと言えば、私たちがあまりにも実を結ぶということにこだわって、このお話をして下さっているイエス様から目をそらしてしまっているからではないかと思います。

イエス様がこのイチジクの木のとえをもって求められている、実を結ぶということはどういうことなのでしょう。

今日のイエス様のお話のイチジクの木は、ぶどう園の主人である神様が植えてくださったイチジクの木です。そして、そのイチジクの木は、ぶどう園の主人である神様のぶどう園の中に植えられたのです。イチジクの木が結ぶべきイチジクの実、イチジクの木が切り倒されずに残るために必要な、イチジクの木の運命を左右するイチジクのための実でもあります。何よりもその前に、ぶどう園の主人である神様がイチジクの木に求めておられるイチジクの実です。このように考えると、ぶどう園の主人である神様がご自分のぶどう園の中に植えてくださったイチジクの木は、洗礼の恵みによって神の子とされ、神の民の一員とされたカトリック信者としての私たち一人ひとりに向けられた、イエス様の思いを語るたとえ話であることが分かります。大切なことは、今日の福音の前半と

後半に語られている、「悔い改める」ということと、「実を結ぶ」ということがどのように結ばれて、今日の福音の一連のイエス様のおことばとなっているのかということです。「悔い改める」ということと「実を結ぶ」ということは、イエス様の中でどのように一つに結ばれて、イエス様の思いを私たちに伝える、今日の福音となっているのでしょうか。「悔い改めなければ滅びる」「実を結ばなければ切り倒される」。そういうことにならないように、そうならないとイエス様は私たちに呼びかけておられるのです。

私たちは「悔い改める」と「実を結ぶ」とは別々のこととして受け止めてきたかもしれません。「悔い改めて」それから「実を結ぶ」というふうに理解しているかもしれません。けれども、今日の福音で気づかせていただいたことは、もしかしたら、「悔い改める」ということと「実を結ぶ」ということは、イエス様の私たちへの同じ一つの思いを伝える表現なのではないかということです。そうだとしたら、悔い改めることが実を結ぶということであり、実を結ぶということは悔い改めることだということになります。何故そのように言えるかという、悔い改めるということは心の向きを変えるということであり、立ち戻るということだからです。どのように心の向きを変えるかという、実を結ぼうとあせる心を抑えて、自分が神様によって、そのぶどう園に植えていただいたイチジクの木であるという原点に立ち戻るのです。このことが、悔い改めるということです。そして、それがどうして即実を結ぶことになるかという、そうすることによって、このイチジクの木を植えてくださった、神様の思いが私たちに受け入れられることになるからです。神様がイエス・キリスト様の十字架の死と復活によって、私たち全ての者にもたらそうとしておられる救いが、私たちによって受け入れられることになるからです。神様がそのみ子であるイエス・キリスト様をこの世に遣わされて、私たち一人ひとりに、この世界の全ての人に届けようとしておられる神様の愛の贈り物を受け取らせていただくことによって、神様が私たちのために用意してくださった救いのご計画が実現したことになります。教会の洗礼の秘跡を通して、私たちを豊かなぶどう園の中に植えてくださった神様が私たちに求めておられる悔い改めとは、日常の生活の中で何とか自分が目指す実を結ぼうと奮闘している私たちが、私たちのカトリック信者としての信仰の原点に立ち戻るということです。そこにおいて、神様が求めておられる実を結ぶ可能性が与えられるのです。神様がイエス・キリスト様の十字架の死と復活を通して開いてくださった、豊かなぶどう園の広がりの中で、その豊かな恵みの園の中で、私たちは神様の子らとしていただいた者たちとして自分たちが受け入れ信じたカトリックの信者としての信仰が如何に素晴らしい恵みであるかを常に新たに味わうよう招かれているのです。16世紀の迫害の時代を生きわたしたちの信仰の先輩方が信仰のためにそのいのちをささげることが

出来たのは、カトリックの信者としての信仰を本当に受け入れていたからです。宣教師たちがいのちの危険も顧みず長く苦しい航海の末に伝えてくれた教会の信仰を受け入れ、本当に信じていたからです。自分たちは洗礼によって、この世のいのちを超える神様の永遠のいのちを与えられ、神様の子らとされたということを本当に信じていたからです。人目を避けるようにして訪ねて来る、司祭たちがラテン語でささげるミサとそこでいただくご聖体が、苦難の中にある彼らの本当の支えとなっていたからです。日毎に唱える神様と聖母マリア様への祈りが本当に届いていると信じる事が出来ていたからです。身分制度のはっきりとしていた当時の社会の中で、神様のみ前にあって自分たちは皆兄弟姉妹であると信仰によって受け入れあった者たち同士の、それにふさわしい共同体の喜びを知っていたからです。協力し合ってそれを守り抜くためには、めいめいが自分のいのちも惜しくはないと真剣に受け止めていたからです。病める人、身寄りのない人、その日の生活もままならない貧しい人たちを助けることが、神様への感謝を表す自分たちの愛の務めであることを身をもって実践できていたからです。繰り返しますが、これら全てはあの人々が、私たちが信じている同じ神様への信仰を本当に信じていたからです。私たちの信仰の先輩方が示してくださったあのような力強い証を心に思い浮かべる時、悔い改めて信仰に立ち戻ることが、神様が求めておられる実を結ぶことになるのだということが分かるのではないかと思います。そのような今私たちに求められている、私たちのカトリック信者としての、本来の信仰への回心の恵みを求めて、今日の黙想会をともにおささげしたいと思えます。

カトリック高円寺教会  
主任司祭 吉池好高